取り組む姿勢と目的

構造デザインを求めて ⑫

文・福村 俊治（チームドリーム代表）

最終講義の記念撮影　受講者登録91人、のべ400人近い方々が渡辺邦夫日曜学校沖縄講座に参加いただいた。講義の話の多くは「目からウロコがおちる」構造の話ばかりだった

トロピカルビーチでの懇親会　渡辺氏の友人、広島の新田さん（左）も飛び込み参加し、自分の長い建築経験を沖縄の受講者に熱く語っていた

受講者と渡辺先生との対話　琉大生の安谷君は自分の将来について相談。渡辺先生いわく「早く進路を決めて走れ」

渡辺邦夫先生が語る構造の話は、学者や研究者の先生方が語るような抽象的・一般的なものでなく、常に構造設計に携わる実務者の「具体論・応用論」である。だから、一言一言が強烈で、自慢気に聞こえる成功話、語らなくてもいいような失敗話、時には建築家や他の構造家への非難とも聞こえる熱い話が飛び交う。最終講義では構造の話というよりは構造デザインを志す姿勢と目的について以下のように語った。

「構造デザイン」そのものは、緊張感のある「実務の世界」の中で直感力と想像力から生まれるもので、その斬新な発想は「経験に頼らない」「経験を基調におく」この二つの矛盾する思考から生まれるものだ。なぜなら、建物をつくるという行為は一回きりのもので、敷地・予算・設計・施工などの諸条件が変われば同じやり方では解決できず、その都度新たな発想や思考が必要となるからだ。しかし、構造学が「経験工学」とも言われるように、先人たちの経験を常に学び、次の新しい展開に生かすことや、他人の経験を自らの経験として常に取り込む事が基本的に大切である。

構造デザインとは何か

構造デザインを志す人々へのアドバイスとしては、出発点で大切なのは優れた前例の「模倣」から始め、その到達点でマネした考え方や計画を独自の案に変化・成長させ、「進化」することが早道である。そのためには、模倣のための不断の学習と進化のための不断の努力が必要で、その結果として独自の「構造デザイン」が生まれると考えるべきである。だから、目標を高くおけば、「構造デザイン」の多様な可能性も発見できる。また、自分のやった仕事が完成したら常に「自己採点」し、反省とともに次の努力目標を考える習慣をつけることも大切である。

そして今、地球環境が悪化している事を考えれば、時代と社会の文化表現である建築を愛する建築家やエンジニアひとり一人が、「宇宙・自然・環境・ヒト」の関係を解き明かし、建築で何をすべきか真剣に考える時期であり、構造デザインこそが大切であると語った。

講義の最後に受講者一人一人が熱い思いで渡辺氏へ講義の感想や質疑応答を行い、無事終了。そして、ビーチでの懇親会へ移動した。梅雨明けの青い空、青い海、白い砂浜で大量の肉とビールを食べ飲み、今後の沖縄の構造のあり方をみんなで熱く語り合った。

―おわり